

2月4日 蠟梅

中庭の蠟梅が良い香りを漂わせている。

もともと社交的でない私は、学年や教科の先生方とは話をするものの、接点のない先生やましてや管理職の先生と話をする事なんてほとんどなかった。ある学校でのこと。そんな私に、ことあるごとに声をかけてくださる校長先生がおられた。

ある日、校長室で私にこんな話をされた。「愛川さん、私は蠟梅の花が好きで、この季節になると必ず校長室に生けるようにしているんだ」黄色い小さな花弁を愛でるように見つめ、一輪挿しを私の前に差し出された。精巧に作られた蠟細工のような小さな花は甘く香り、派手さはないが奥ゆかしく美しい。なんとなくその校長先生のお人柄と重なるものがあった。

何度か仕事帰りにお宅までお送りしたことがあるが、そのたび何かしらのお土産をくださった。そのときいただいた奥様お手製のティッシュカバーは、今も私の愛用品である。真面目で厳しくそして優しい校長先生だったが、退職して数年、六十半ばで亡くなられた。

思えば今の私があるのも、あの校長先生が道をつけてくださったからかもしれない。

